



Title	ピコ・デッラ・ミランドラにおける自由意志の問題
Author(s)	伊藤, 博明
Citation	基督教学, 20, 20-22
Issue Date	1985-07-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46439
Type	article
File Information	20_20-22.pdf



[Instructions for use](#)

ピコ・デッラ・ミランドラに

おける自由意志の問題

伊藤 博 明

一般に、イタリア・ルネサンスにおける「人間」の問題が論じられるとき、必ずピコ・デッラ・ミランドラ (Pico della Mirandola, 1463-94) の著作『人間の尊厳について』(De hominis dignitate) への言及が見られると言っても過言ではないであろう。⁽¹⁾

彼の人間観はルネサンスという時代の「典型」として語られることもしばしばなのであるが、他方、その解釈と評価をめぐって様々な見解が存在していることも事実である。小論の目的は、ピコの人間観に関する問題、すなわち、人間の自由意志の問題について若干の考察を行うことにある。

『人間の尊厳について』は、メルクリウスによって「偉大なる奇跡」と称される人間の本性を説明することから

始められる。ピコによれば、神は人間に、定まった地位、固有な相貌、特有な贈り物を与えず、いかなる地位、相貌、贈り物をも、自己の考えに従って所有できる被造物として人間を創造した。神の最初の人間、すなわち、アダムに対する言葉は次の通りであった。

《アダムよ〔……〕おまえは、いかなる束縛によっても制限されず、私がおまえをその手中に委ねたおまえの自由意志に従っておまえの本性を決定すべきである。〔……〕われわれは、おまえを天上的なものとしても、地上的なものとしても造らなかつたが、それは、おまえ自身⁽²⁾のいわば「自由意志を備えた名譽ある造形者・形成者」として、おまえが選び取る形をおまえ自身が造り出すためである。おまえは、下位のものどもである獣へと退化することもできるだろうし、また、上位のものどもである神⁽³⁾的なものへと、おまえの決心によっては生まれ変わることもできるだろう。》

人間には、他の被造物と異って、あらゆる種類の種子と生命の芽が挿入されており、人間は自分の育むものにしたがって、植物、獣、天界の生きもの、天使になり、さらに自己の一姓の中心へと引きこもるならば、彼の霊は神と一つになり、父の「孤独の闇」の中に置かれるこ

となる。こうした、人間本性の不定性と人間が所有する自由意志についてのピコの主張は、しばしば彼の思想的核心を形成するものとされてきた。例えば、ピコ研究の第一人者であるガレンは、ピコの思想を駆りたてている根本的な動機は、神に由来するがゆえに、神的で、あらゆる自然的・人為的束縛から自由な人間の精神がもつ無限の価値の主張であるとし、ピコにとって「人間の唯一の条件とは、条件のないこと、自由である。人間の強制とは自由であることへの強制である。自分の運命を自ら選ぶことがただ一つの人間に課せられた強制である」と述べている。

しかし、ピコの人間の条件と自由意志に関する見解に對して、一つの神学的問題を提出することが可能である。それは、人間に上述したような自由を認めた場合、ピコは「原罪」をいかに考えていたかという問題である。中世の神学的伝統によれば、アダムの「原罪」以降、人間は完全な自由を所有する者ではなくなったとも、あるいは、人間は自己の自由意志だけでは悪をしか選択しえないともされているが、ピコはこうした主張を否定し、人間に始原の自由を付与したのであるうか。たしかに『人間の尊厳について』の叙述は、この観点を支持している

ように思える⁽⁶⁾。ただし、クリステラーも指摘しているように、先に引用した神の言葉が「原罪」以前のアダムに向けられたものであったならば、それがアダム以後の人間に對しても全的に適合するのかがという疑問が残る。そして、この点について『人間の尊厳について』は、明瞭な解答を与えていない。しかし、われわれは、この問題についての示唆を、ピコの別の著作『ヘプタブルス』(Hep. ptapuls)の一節から受けることができる。「人間の世界」を論じた章において、ピコは次のように述べている。

《われわれはすべて、神よりもむしろサタンに従った最初のアダム——われわれは肉に基づき彼の息子である——において、自己の形を汚し、人間から獣へと退化したが、同様に、父の意志を果し、自らの血によって靈の悪に打ち勝った、新しきアダム、すなわち、イエス・キリスト——われわれは靈に基づき彼の息子である——において、恩寵により、自己の形を再び整えられ、人間から、神と養子縁組をしたものとして再生したのである。》⁽⁷⁾

『人間の尊厳について』と『ヘプタブルス』の内容上の関連等、詳論すべきことは多々あるが、それらを省き、結論的に言うならば、ピコにおいては、アダムによって犯された罪はキリストによって贖われ、人間は再びアダ

ムの所有していた自由を獲得したとされるのである。したがって、『人間の尊厳について』における神のアダムへの言葉は現実の人間の条件を指し示すものであると言えるであろう。人間は、原初のアダムと同様に、自己の自由意志に基づいて自己の本性を決定し、自己の歩むべき道を選択する存在なのである。こうしたピコの人間観の中に、人間の自由に対する彼の強調と称揚を見て取ることは容易である。だが、同時に、それは、人間が置かれていた不安定で危うい状態をも明示していることを忘れるべきではないだろう。それゆえ、ピコは、『人間の尊厳について』において、人間の「驚嘆すべき」本性を明らかにした後、こうした本性をもつ人間が神の高みへと至る道程を説くことへと向かうのである。

註

- (1) E. g. G. Gentile, *Il concetto dell'uomo nel Rinascimento*, Firenze, 1916; E. Cassirer, *Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance*, Berlin-Leipzig, 1927; Ch. B. Trinkaus, *In Our Image and Likeness: Humanity and Divinity in Italian Humanist Thought*, London-Chicago, 1970; P. O. Kristeller, *Renaissance Concepts of Man and Other Essays*, New York, 1972.

- (2) この点に関しては、一九八五年、国文社から刊行予定の、大出・阿部・伊藤共訳『ピコ・デッラ・ミランドラ』『人間の尊厳について』の「解説」及び、北大哲学会編『哲学』第二十号に所収予定の拙稿「ピコ・デッラ・ミランドラにおける宇宙と人間」を参照されたい。
- (3) G. Pico della Mirandola, *De hominis dignitate, Hypothesis, De ente et uno, e scriptis raris*, ed. E. Garin, Firenze, 1942, pp. 104, 106. (訳文は上述の訳書に依って)。
- (4) E. Garin, *Giovanni Pico della Mirandola. Vita e dottrina*, Firenze, 1937, p. 119.
- (5) Idem, *L'umanesimo italiano*, Bari, 1952. 清水純一訳『イタリアのヒューマンイズム』創文社、一九六〇年発行、一一一頁。
- (6) Cf. E. Cassirer, "Giovanni Pico della Mirandola: A Study in the History of Renaissance Ideas", *Journal of the History of Ideas*, III (1942), pp. 123-44, 319-46.
- (7) P. O. Kristeller, "Giovanni Pico della Mirandola and his Sources," in *L'opera e il pensiero di Giovanni Pico della Mirandola nella storia dell'umanesimo*, Firenze, 1965, Vol. I, p. 53.
- (8) Pico della Mirandola, *op. cit.*, p. 286.